

# 「虫」に寄せて

——歴史的出来事の空白をめぐる検討

## 四 條 知 恵

### 1 はじめに

『歴史』もまた物語であるという視点が導入され、隣接領域である文学との関連性が重要視されるようになった<sup>①</sup>と歴史学者の成田龍一が述べるように、「歴史と語り」という観点<sup>②</sup>から見ると、歴史叙述に着目することで、歴史と文学の境界はゆらいできた。歴史の叙史的側面に着目すると、一定の事象の隠蔽、排除が必ずそこに存在するという問題に目を向けざるをえず、語られないもの、すなわち歴史的出来事の空白をどのように扱うのか、という問題が生じてくる。歴史的出来事の空白と一口に言っても、語る人がなく、資料がないために生じたもの、構造的に焦点があたらないために相対的に語られないもの、忘れ去られているもの、隠蔽されたもの、語ろうとしても語る事ができなかつたも

の……と相互に関連する様々な形の空白があるが、本稿では、青来有一の『爆心』に収録された「虫」<sup>③</sup>を手掛かりに、これらの歴史的出来事の空白への接近の可能性を検討したい。

### 2 「虫」

#### (1) 虫のイメージ

「虫」は、カトリック教徒であり、被爆体験を持つ「わたし」が、思いを寄せ、不倫関係を持った「佐々木さん」を思い返すという内容の短編で、その中には、ウマオイを中心に虫のイメージが散りばめられている。登場する虫は、被爆時の回想ではウマオイ、たくさんの黒い蟻、死体の腸の中でもどもどと動いていたサナダムシ、避難した竹林で見たジョロウグモ、蠅、その他の場面では蚊、蠅捕り紙にびっしりついた蠅、蚤、虱、ウマオイ、カブ

トムシ、蟬、アブラゼミの青白い幼虫と様々で、中でも、「わたし」とウマオイの関係は多義的に描かれている。ウマオイは、冒頭で悪夢として登場するほか、「また、生きておるね？」と問いかけることで「わたし」を生に呼び戻してくれた存在であり、「わたし」にとつての守り神でもある。また、生きるために西瓜に吸いついた「わたし」自身の姿を表すものであり、「佐々木さん」の化身であるとともに、信仰をもたないものの象徴でもある。全体として、現在と過去が交錯する中で、物語の随所に「わたし」の視点を通した虫の姿が織り込まれている。

## (2) 虫と信仰の関係

虫と信仰の関係に着目すると、カトリック教徒である「わたし」は、信仰との関わりの中で、このように虫を語っている。

どんないのちも、この世のいのちは、なんとかがんばって生き残つてきたいのちであります。その難儀を思うと、哀れでいじらしくもあり、マリアさま、わたしは蚊のためにでも祈らんでもおられん心持になります。でも、マリアさまも、イエスさまも、どうせ蚊なんかにはゆるしはあたえられんでしょうね<sup>⑤</sup>。

ここでは、蚊という虫は、ゆるしを与えられることのない、信仰から排除された存在である。また、原子爆弾から神様のおかげで生き残つたという「わたし」に対し、「佐々木さん」が、「おれらは虫といっしょさ。食べて、交わり、子を残していく……。誰

が生き残り、誰が死ぬかは、ただの偶然でしかない……それだけのことさ……」<sup>⑥</sup>と答えるように、虫の存在は、信仰を否定する文脈で用いられる。このほか、「原子爆弾を炸裂させた時、ひとは神さまを捨てて、みんな虫になってしまったのだとわたしは思います」<sup>⑦</sup>、「このままの姿で生きるなら、いつそガマにでも、トカゲにでもなつて、なんの信仰もない虫になつたほうがどれほどましかとも思いました」<sup>⑧</sup>などの文章に見られるように、信仰を持たないものの象徴として、虫は登場する。虫は、信仰から排除されると同時に、信仰の介入を許さない、信仰を持たないものの象徴として、語られるのである。

この背後にあるのは、カトリック教徒である「わたし」や「わたし」の祖父母が抱える原爆被害に対する根源的な問いである。「わたし」の祖母は祖父に、「なして、あげん目に遭わんばいかんとでしょうか」「わしらは、なんか神さまの怒りに触れることばしたとでしようか」と切々と問いかける。青来は、この問いに虫の存在を対置することで、なぜ私たちが、という問いかけに信仰によって答えを与えることを拒否している。

## (3) 人の世界から排除された虫に対する「わたし」の目線

「わたし」の虫に対する目線は、作品の中のそこに描かれている。「わたし」は、魚屋の店頭などにぶらさがつていた蠅捕り紙にびっしりと蠅がくっついていた光景を思い起こし、「人間は虫たちにも生かされておりながら、微塵のいのちなどには、まったく考慮しない罪深い生き物にも思えてしかたがありません」<sup>⑨</sup>と蠅のいのちに思いをめぐらす。また、「人間がひとり生きて

いくためには、眼には見えん幾億ものいのちが必要と聞いたことがあります<sup>(9)</sup>」と、人は虫によって生かされているという観点から、人の生に虫のいのちを取り込もうとする。そして、虫を呼びかけることで人を生に引き戻す存在としても語っている。冒頭の夢の中では、ウマオイが「わたし」に「まだ、生きておるね？」問いかけ、それが被爆時の回想へとつながっていくが、「わたし」は被爆者の肌にかかるとも、同様の視線を向けている。

そのひとたちの肌はすでに膿み、蠅がたかっています。死の方へすと消えていこうとしている魂に、「まだ、生きておるね？」と蠅が呼びかけて邪魔をしているように思え、「そのまんまにしてあげてくれんね、そのまま眠らせてあげてくれんね」と心の底で蠅に語りかけてもいたのです<sup>(10)</sup>。

この中で蠅は、「まだ、生きておるね？」と呼びかけることで、死にゆく人を邪魔する存在として語られる。これは、原爆被害の記録や体験記に見られる虫の語りとは、異なるものである。

### 3 原爆被害の記録、体験記における虫の語り

そもそも昆虫の原爆被害は、原爆被害の歴史において、どのように語られているのだろうか。広島、長崎の原爆被害に関する物理学、医学・生物学、人文社会科学にわたる学術的な研究成果の集大成として出版された『広島・長崎の原爆災害』は、「動植物に対する放射線の影響」という項において動物と混じる形ではあ

るものの、昆虫の被害に全五〇四頁のうち二頁強を割いている<sup>(11)</sup>。これによれば、動物学的調査として、情報収集による被爆直後の被害調査、動物相の実地調査、動物への影響を調べるための実験的観察という三種の調査が行われた。第一次実地調査は、広島で一九四五(昭和二〇)年九月二二日〜一〇月二二日の約一カ月、長崎で同年一〇月三日〜十五日の十二日間行われ、さらに、広島で一九四七(昭和二二)年一〇月に第二次実地調査が行われている。ただ、この中で被爆直後の動物相の調査については、「当時の状況を聞きとる以外に調査の手段がなかった」<sup>(12)</sup>と記され、昆虫については、蚊は被爆直後に爆心地から約一・〇kmではいなくなり、蚊、ハエともに数日後には著しく増加したという程度の記述があるのみである。なお、これらの調査で、昆虫への放射線の影響は明確に示されていない。

『広島原爆戦災誌』に収録された呉鎮守府による「昭和二十年九月 広島市二於ケル原子爆弾二関スル調査(一般的調査)では、「其ノ他ノ生物ノ被害」として「適確ニ此ノ見地ヨリ調査セル資料ナク詳細不明ナルモ、確實ナルニ、三ノ兆候ヲ挙グレバ次ノ如シ」と、魚類、鳥類、牛馬の死の記述に混じり、「(4) 災害三日後市中踏査ノ際モ、人間以外ノ如何ナル生物ニモ遭逢セズ死屍累々タルニ一匹ノ蠅等ヲ見カケズ」(5) 災害後兩三日市中二起居セル者ハ虫蚊類ヲ経験セザリシトイフ」と二行のみ、虫の不在が示されている<sup>(13)</sup>。

以下では、『広島原爆戦災誌』を例に、原爆被害の記録および体験記などの中で虫がどのように語られているのかを見ていきたい。同書は、広島市による総合的な原爆被害の戦災誌として、市

内の各地区や官公庁を始めとする事業所、学校などの団体の被爆状況を記述し、多くの体験記を引用している。表一は、『広島原爆被災誌』全五巻<sup>(14)</sup>に記載された昆虫の種類および言及数を示したものである。なお、基本的に『爆心』『虫』に登場する昆虫名を確認し、比喩としての言及は除いた。

表によれば、ハエ、ウジ、蚊への言及が最も多く、シラミ、ノミが続き、ブト、セミ、トンボが各一、その他の昆虫名の記載はない。言及される虫の種類には偏りがあり、基本的に「害虫」の類である。圧倒的な情報量のある『広島原爆被災誌』全五巻よりも、短編「虫」に描かれる昆虫の種類の方が豊富である。同被災誌の本文の中で、どのように虫が語られているかを見ると、例えば舟入地区の被爆後の生活状況を記した箇所には、「ハエの多数

表一 『広島原爆被災誌』一〜五巻における昆虫の種類および言及数

種類	言及数
ハエ	61
ウジ・ウジ虫	42
蚊・ヤブ蚊	33
シラミ	17
ノミ	11
ブト、セミ、トンボ	1
ウマオイ、アリ、サナダムシ、ジョロウグモ(クモ)、カブトムシ、アブラゼミ	0

発生」という次のような描写がある。

八月末ごろから九月へかけてハエが一せいに発生した。体の前面は追っ払うが、背筋は追えないので、まっ黒になるほどとまっていた。被爆直後、地区に入った亀田正士の談によると、「焼け跡に残っている死体に、大きなウジがわき、腐肉を喰っていた。一見、形は人間だが、その形でウジが一面に取りついてた。腐肉を食い終ると、また次の死体へウジが群をなして移動していた。」<sup>(15)</sup>という。

ハエやウジは、しばしば「被爆体験証言」において言及され、多くの「市民が描いた原爆の絵」にも描かれているが、ここでは、人を煩わすもの、人の原爆被害をなすものの一部として語られている。「人間の被害を語る」という枠組みの中で、虫については、人間の被害の悲惨さを強調する、あるいは「害虫」という定型化した語りとなっているということが指摘できる。言い換えれば、人間を中心とした原爆被害の歴史において、虫の被害は語られないものとなっている。

歴史は資料、つまり記録されたこと／起こったことを基軸とするが、それゆえに、特に資料がないために生じた空白を描くことには、限界がある。記録されていない出来事を語るには、おそらく、そこに空白があると示すという方法しかない。では、文学においてはどうだろうか。原爆文学において、「起こったこと」の縛りがなくかという、そうではない。当時『爆心』を執筆中だった青来有一は、林京子とのやり取りを次のように振り返って

る。

「被爆の経験もない自分が、被爆の話を書いているが、林さんを初めとして被爆者の方々から、これはちがう、こんなものではなかったと言われるのが怖い。そう言われたら、もう、まったく書きようがなくなる、そこが辛いところです」といった趣旨の話をしたと記憶していますが、講演の後で、林京子さんから、「自由に書いてかまわないのよ、文学とはそういうものなんです」と仰っていただきました。あの時、なんとなく飛んだというか、ああ、書いていいんだな、とそれまでのまだどこかで、原爆の重さにあがっていた自分から自由になった気がします<sup>(16)</sup>。

この言葉に先立つて青来は、被爆の話はフィクションにしにくいところがあるが、『爆心』の各短編を書いているときには、そこをあえて思い切つて書いてみよう、ありえない話にして、自由に書いてみようという意志がありました」と述べている。青来は、原爆被害という歴史的文脈を踏まえつつ、小説という媒体を通して、あえて、ありそうな「ありえない話」を展開しようとしている。「ありえない」ということは、起こったことから自由になるということでもある。歴史を記述するという意味では致命的だが、「ありえない話」という記述スタイルをとることで、従来の歴史記述の枠組みでは描かれることのなかった、別様の語りが生まれている。

研究会では、筆者の報告に対し、『爆心』は、虫の視点から書

かれているのではなく、やはり人間中心の視点から書かれているのではないかという御指摘を頂いた。確かに、短編小説「虫」も、歴史的な記録の中では見られない虫をめぐる様々な語り方を提示しているものの、基本的には、「わたし」という人間を中心とした物語であり、その中で依然として虫の被害は空白のままである。仮に、原爆被害を受けた虫を一人称とする文学があったとしても、起こったことに軸足を置かならば、虫の被害を描き得たということにはならないだろう。

前述のように、相互に関連する様々な形の歴史的出来事の空白があるが、歴史記述にせよ、文学として歴史的出来事を扱うにせよ、空白を指摘するには、まず、語られていないものの存在に気づかねばならない。そこに共通するのは、過去の出来事に思いを馳せる、想像力である。歴史学は、常に「起こったことの空白」を埋めようと、歴史を語る視点を模索してきたが、埋もれた空白の存在を呼び起こすという点で、文学は歴史を凌ぐ大きな力を発揮する。「ありえない話」という形の記述スタイルは、歴史記述とは異なる形で、そこに「起こったかもしれない出来事」として空白の存在を喚起する可能性を持っているのではないだろうか。

## 注

- 1 成田龍一、二〇一〇、『増補「歴史」はいかに語られるか——一九三〇年代「国民の物語」批判』筑摩書房、一四頁。
- 2 文字史料、写真、音楽、記念碑などの様々な媒体を用いながら、従来の歴史学のように歴史を叙述することを目的とするものではなく、歴史を語るという行為自体、つまり、なぜそのような語りが成

立したのかというところに目を向けるもの(四條知恵、二〇一五、『浦上の原爆の語り——永井隆からローマ教皇へ』未來社、一〇頁)。

- 3 青来有一、二〇一〇、『爆心』文藝春秋、八九、一三六頁。
- 4 同前、九五頁。
- 5 同前、一一八頁。
- 6 同前、一二〇頁。
- 7 同前、一二三頁。
- 8 同前、九九頁。
- 9 同前、九九頁。
- 10 同前、一〇九頁。
- 11 広島市長崎市原爆災害誌編集委員会、一九七九、『広島・長崎の原爆災害』岩波書店、四三、九頁。
- 12 同前、四三頁。
- 13 広島市役所、一九七一、『広島原爆戦災誌』五卷、八七六頁。
- 14 広島市役所、一九七一、『広島原爆戦災誌』一、五卷。
- 15 広島市役所、一九七一、『広島原爆戦災誌』二卷、六七七頁。
- 16 陣野俊史、二〇〇九、八、『その後』の戦争小説論⑦——青来有一『爆心』とポスト原爆小説』『すばる』集英社、二八六頁。